

軽井沢日記のうち

小諸の半日

見給へこれは此あたりにて鉄道草というなりと、
我らをあないせらるる藤村の君ゆびさし給ふ。おも
しろの草の名や、ここに汽車のたよりいできてより、
此草の種いづこよりかはこぼれておひしなれば、名
づけらるるとぞ、ただすくすくとたけ高くをかしげ
なきさまなれど、いづこをか住わびてここにはうつ
りきにけん、いとあはれなり。

懐古園といふは、古き城跡に何とかやいふ社たて
たる処也。いと低くいづこよりも見えぬ処をえりて、
あだふせがん為にきづきたる城なりとぞ。昔の人の
功ほめたる碑あれどえよまず。うしろの方の見渡し
よき処にたちて、こなたかなた見おろす。松いと多
きがただますぐにおひたちたる、海のほとりのもの
とはいたくことなれり。彼おれくねりたるはふきし
をる風いとはげしければ也。さればよ、其処々其
折々にてさまざまにかはるものなりけり。こは松の

みに見る事かとは思ふも、例のと人やにくまむ。

千曲川のながれはるかに白くみえて、水の音さび
しく悲し。おもひ川思ふ事なくて渡るともと、師の
君のうたひ給ひけむ。これは其川ならねど、まこと
に堪へがたう人の心をかきみだすものは、水の音な
りけり。青き田面は風にそよぎて、そここに家ゐ
あり。遙に聳えし高嶺をさして、かしこは鷲のすむ
山なりと、あないの君をしへ給ふ。谷には蔦かつら
繁くかかりて、物恐ろしき心地す。かはりやすき山
のさまよ。小さき黒雲かかりぬと思ふほどに、やう
やう広がりて雨こぼれいでぬ。いかで今日ひと日と
どまりて、布引の観音をととどめられるれど、さは
る事あれば軽井沢に帰りぬ。

花つみ

あすは帰りなんとする夕べ、都なる幼き姪のつと
にせんと花つみにゆく。昨日見おきし色よき花おほ
く咲き乱れたる所にきぬ。見渡せばはてなき広野の
はては、五百重山たちかさなりて、うしろに見えし
浅間はいただき灰色の雲に隠れ、麓のみぞ少し見ゆ

る。いづこにか水の音なひ幽かに響きて、吹くとしもなき風にはらはらとちるは、尾花が袖につつみあへぬ何の涙ぞ。庭の教よそにすとは見れど、色よく咲きし撫子いと哀れなり。われもかうはいとさびし。此夕暮をいかにせましと、小さき花の一とこころにあつまれるやうなり。女郎花、同じ女のたぐひと思ふに限なくあはれ深し。草隠れに名もなき小さき花こそ悲しけれ。いかなる宿世なりけんと、其ささやかなる限をあつめぬ。かなたに黄なるさ百合一つ見出したる、いと嬉し。此花束の女王の君にせんと近よれば、しげみをぬひて流れゆく水のほとりに今一つさけり。あはれゆく水と何をか語る。さ百合は、此さびしきくれにしばしとどまり給へといへど、水はいたく思ひせまりて、いづこまでもと急ぎてゆく。ただずみをる程に、うすきかげ水にくだけて細き夕月光そひぬ。ま昼は日の光におちてかたねぶりせる月見草、今こそとよそほひいでつ。心ゆく此けしきよ。我心をいづこまでとかそさふ。いざさらばこの花野よ、命あらば又こん年。いざさらば月よ、あすよりは塵多く処せき都のすまひにて。

底本：阪本幸男編著「橘糸重歌文集」短歌新聞社

平成二十一年(2009)年十月十五日発行

初出：「心の華」第三卷第九号

明治三十三(1900)年九月二十日発行

筆名：橘糸重子

入力：小林 徹

公開：令和四(2022)年五月九日

橘糸重 [【散文作品集】](#) に戻る。